

奥武蔵	雨の中のおしるこ(有間谷)	No.059
-----	---------------	--------

昭和41年2月27日

二月の奥武蔵、例会と称しているハイキングで、今回は5名が参加。いつものメンバーに久保、佐藤の二人が加わった。私にとっては国立に住むようになってから初めての奥武蔵で、一度乗ってみたいと思っていた西武国分寺線に乗ることができるのも楽しみのひとつ。

国分寺を出ると、日立の横を通って、実に武蔵野という表現がぴったりとするような野原と雑木林の中を走り、「恋ヶ窪」。と言っても実際のところ、今や住宅地も増えて国木田独歩には申し訳ないような景観。

麦踏みする人も見られる一面の畑地をしばらく走る「鷹の台」「小川」間はまだまだ独歩の武蔵野が残ってくれている。「小川」から上水線の玉川上水方面を分け、次が西武新宿線の「東村山」、終点。

ここで新宿からの電車に乗り換え、次の所沢で恩田、石川、佐藤、久保が乗ってくる池袋線の飯能行に乗り換えて、合流。三回も乗り換えて飯能まで来ると、もうひととおりの旅が終わってしまったような気分だが、時間的には都心に出て、新宿・池袋と周って来るのよりずっと早い。

飯能から名栗川に沿って有間川の合流点の河又までバス。河又から歩き出すと、どんより曇っていた空がいつの間にか泣き出した。

すると、恩田はザックから鉄鍋を取り外し頭にかぶり、ポンチョと合わせて「潮来の伊太郎」。(右写真)南アルプスでは1日3600カロリーの栄養を取るために働いてくれた鉄鍋が、破廉恥で不衛生な帽子に化けた。

このほかに、ポンチョ、ビニールズボン、ビニール風呂敷などなど各々思い思いの雨具に身を纏い、有間谷に入った。雨は腰を据えて降っていて、まず晴れることは望めない状況。

当初の計画では、有馬谷から支流の逆川に入り、逆川乗越から蕨山(1044m)を目指そうという腹積もりだった。しかし、今回の旅ではとりわけ晴天を求めてもなく、天気が良くなければどこかでお汁粉を作って食べながら雑談でもしようという程度の趣向だったので、特段の落胆はなかった。

有間小屋よりしばらく奥に入ったところで手ごろな河原を見つけて、休憩が決定。いくらか小降りになった河原にポンチョで掘って小屋を組み、そこで予定通りお汁粉パーティー。(右写真)

久保が持ってきたカビだらけの餅のこと以外はあまり記憶にないし、メモもとってない。

河原で拾った枯れ枝で、雲取小屋の小屋番に教わったテクニックでパイプを作ってみたが、なかなか思い通りにはならなかった。

食べた後は少し歩いたが、山をひとつも登らずに帰ってきた、腹の膨れる山行だった。

数えてみるとこれで100日山に入ったことになる。早いものだ。4年10ヶ月、移り気な私がよくここまで続けられたものだと、我ながらしばし感心。



以上

<後日談> 1986年に有間川の谷には「名栗湖(有馬ダム)」ができて、景色は一変した。湖の一番奥の逆川出合い(落合)の僅か下流の、大ヨケノ頭(771m)への登り口に有馬小屋があったが、今はもうない。

(修正・更新:2023年11月)